森・川・海のつながりに焦点を！

～環境・循環に着目した川の再生へ～

高知県といえばカツオなど海の魚をイメージする方が多いと思いますが、四万十川を始めとする清流も有しており、いまだに専門の川漁師が現存するほか、アユ釣りのメッカとしても全国に名を馳せています。

しかし、河川におけるアユ等の生産量は、河川環境の悪化などにより年々減少を続けており、特に昨年、物部川では長期に渡る異常濁水が発生し、アユなどの河川資源への深刻な影響が大変心配されています。

今回は、深刻な川の状況と併せ、近年拡がってきた川の再生に向けた森・川・海のつながり等、広い視野からの調査、研究や地域住民の取り組みをご紹介します。

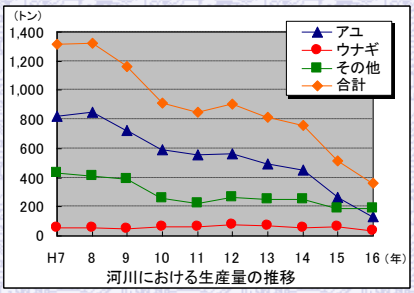
■内水面漁業の現状

漁業生産量では、アユが全体の5割以上を占め、これが総生産量を左右しています。

本県は、アユ生産の大部分を天然遡上に依存する数少ない県で、過去、全国一の生産量を誇った時期もありましたが、資源の減少は著しく、この回復のために人工種苗も放流されています。

ウナギの生産量も、河川環境の悪化などにより、近年では60トン程度と低迷しています。

一方、県内のウナギ生産量の8割以上を占める四万十川産天然ウナギは、その希少さやブランドイメージで人気を博しています。



河川における生産量の推移

■深刻な河川の状況

昨年は春先からの多雨により各河川とも、アユの遡上が少なく、しばらくは十分な漁獲が見込めない状況が続きましたが、5～6月の解禁後は、一部河川では例年並みに漁獲が回復しました。しかし、物部川では平成16、17年と続いた台風の影響により、山林が崩壊して土砂が河川に堆積し、本来なら瀬と淵を繰り返す構造がほとんど変化のない下流部のような形へと変化するとともに、溜まった土砂が降雨の度に流れ出して濁りが収まらない、アユの成育には致命的な状況となりました。

■どこに原因が

濁水の直接の原因は森林の崩壊ですが、河川環境のバロメータと言われるアユ資源の減少は、河川形状の変更による環境変化、広葉樹の減少（針葉樹の増加と手入れ不足）、海水温の上昇、冷水病、カワウやブラックバスによる食害、落ち鮎の乱獲など様々な要因が重った結果として、現れた現象と言えます。

この状況を打開するため、物部川では稚魚放流のみに頼らず、産卵場の整備やアユが海から遡上しやすいように河口を掘削するなどの努力により、平成16年にはアユの遡上量は過去最高を記録していました。

一方、須崎市の新荘川では昨年2月に海域で大量のアユ稚魚が見られていたにもかかわらず、河川への遡上は満足のいくものではありませんでした。

これらの原因解明は、今後研究機関が取り組んでいきますが、アユ資源の復活については、川に関係するそれぞれの立場の人が集まりどうすれば少しでも改善できるか、それぞれの立場で出来ることに手を着けていくことが必要ではないでしょうか。

物部川漁協による産卵場整備

■出来ることから

県でもこの現状に対し、来年度に向けてどんなことが出来るか、それぞれの部署で検討を進めています。特に物部川流域で拡がってきた、間伐や産卵場整備などとも連携を取りながら、川を再生する取り組みを少しでも前進させていきます。

NPO、河川関係者等による間伐作業

【コラム】
「漁とFISHING」

古来アユは重要な蛋白源として利用され、当然資源への配慮もあった。が、近年の遊漁者や落ち鮎漁の状況を見ると、日本人の謙虚さは失われたのではないかと感じる。一方、西洋発祥であるルアーやフライフィッシングではキャッチ＆リリースは当然のこととして実践され、その愛好者は資源、環境等への意識も総じて高い。生活の西洋化だけでなく、意識も見習う（復古する）べきではないか。

【編集後記】
川釣りのため独身時に大枚をはたいて購入した四駆。ランニングコストの高さから泣く泣く手放させられたが、夢は捨て切れない。「大きくなったら船を車に積んで釣りに行こうね」「うん！」夢実現のための伏線として今から息子を洗脳してます。(^_^)v

漁業経営のことなら、
今すぐお電話を！

専門アドバイザーが、漁業経営、流通改善について無料でご相談に応じます。
まずはお電話を！

●漁業経営指導協会 tel 088-825-3980
●上原アドバイザー　tel 090-1570-4904

高知県海洋局
かつお通信

高知市丸の内
高知県海洋局
発行人　久保田寿一
編集人　海洋企画課
定　価　無料

漁協合併を推進しましょう
●購買は漁協を利用しましょう
●預金、公共料金は信漁連へ